

令和 7 年度

中学生の主張 in かながわ記録集



いましか語れない、
想いがあるから。

はじめに

国際児童年（1979年／昭和54年）を記念して始められ、今年で47回目を迎えた「中学生の主張 in かながわ」は、「少年の主張全国大会」の神奈川県大会として、すっかり定着しています。

本年度も熱意があふれ、手書きを中心とした、中学生らしく温もりのある835作品の応募が集まりました。

9月28日に県立青少年センターの紅葉坂ホールで開催された発表大会では、「いかに生の感動を届けられるか」に重点を置き、会場には選出された発表者7名のほか、奨励賞受賞者6名、保護者、5名の審査員、スタッフ、一般の観覧者が発表を見守りました。また、審査結果を待つ間のアトラクションについては、本年度はSakae Wakamono Creation 2025による活気にあふれた創作舞台を鑑賞しました。そして、多くの方々のご協力により、発表大会は無事終了し、本県の代表として、神奈川県立相模原中等教育学校2年の坂本咲紀さんを全国大会に推薦することができました。

発表大会では、家族など身近な人から教わった思いやりや、他者から受けた優しさを周りへ返していくこと、伝統継承の素晴らしさを訴えるもの、戦後80年を迎えた世界平和への提言、心身のバランスを崩した時の休息の大切さ、同調圧力に流されず自分の意見をもつことの大切さを訴えるものなど、様々な題材を、それぞれ生の声で個性豊かに表現していただきました。

応募作品の中には、子どもの声を高らかに主張として挙げている傾向が見られました。学校生活や部活動に関する作品の中には、校則の見直しや宿題及び授業の改善、部活動から学んだことなどが多くありました。他にも、政治や選挙・税金に対する考え方、SNSを通した誹謗中傷や生成AIについて考えた作品、世界情勢を鑑みた平和や差別への意見、環境問題、ルッキズム、ジェンダーに関する内容も多くありましたことは、今年度の大きな特徴でした。

本記録集には、本年度の発表大会に選出された7作品と、奨励賞に選出された10作品を収録しています。この記録集を通して、中学生の純粋な想いを多くの方にお届けできれば幸いです。

最後になりましたが、本事業の実施にあたり、県内各中学校の関係者の方々をはじめ、ご応募いただいた中学生の皆さん、ご指導に当たられた先生方、そして、ご協力いただいた全ての方々に心から感謝を申し上げます。

令和8年1月

神奈川県立青少年センター
館長 山中 肇

「中学生の主張 in かながわ」発表大会の様子



最優秀賞（神奈川県知事賞）

坂本 咲紀さん



阿部 慎之助さん



高田 まゆさん



木下 悠誠さん



渡邊 このみさん



丸田 楓夏さん



石川 虹空さん



副賞：バッグ・ペンケース



審査員の先生方



会場の様子



アトラクション (Sakae Wakamono Creation)



最優秀賞（神奈川県知事賞）受賞



講評（丸野審査員長）



優秀賞・奨励賞受賞者のみなさん

目次

◆はじめに	1
◆「中学生の主張 in かながわ」発表大会の様子	2
◆最優秀賞インタビュー（神奈川県立相模原中等教育学校2年 坂本 咲紀さん）	5
◆作品集	
最優秀賞（神奈川県知事賞）	
空気よりも、自分の声を 坂本 咲紀 神奈川県立相模原中等教育学校2年	6
優秀賞	
人と人で繋がる伝統（神奈川県教育長賞）	
阿部 憲之助 神奈川県立相模原中等教育学校1年	7
「妹が教えてくれたこと」（神奈川県福祉子どもみらい局長賞）	
高田 まゆ 神奈川県立相模原中等教育学校1年	8
未完成の僕らだから（神奈川新聞社賞）	
木下 悠誠 神奈川県立相模原中等教育学校2年	9
「ちょっとの勇気、ちょっとの親切」（NHK横浜放送局長賞）	
渡邊 このみ 横浜市立南高等学校附属中学校1年	10
優しさのバトンをつなぐ（t v k かながわMIRAI賞）	
丸田 楓夏 鎌倉女子大学中等部1年	11
「世界初」と「最後」の都市（神奈川県青少年育成アドバイザー連絡協議会会長賞）	
石川 虹空 横浜共立学園中学校3年	12
奨励賞（神奈川県立青少年センター館長賞）（50音順）	
世の中は点数が全てなのか	
天野 瑞久 慶應義塾普通部2年	13
海の輝きのために	
佐藤 和馬 神奈川県立相模原中等教育学校2年	14
検索じゃ出てこない考え方	
佐藤 凜 横浜共立学園中学校3年	15
思い出の場所が世界とつながる日	
竹本 葵瑛 鎌倉女学院中学校3年	16
戦争を知らない私たちへ	
田邊 采美 横浜市立生麦中学校2年	17
今この瞬間を生きること	
長井 麻衣果 横浜市立市ヶ尾中学校2年	18
共に生きる	
長谷川 咲弥香 横浜共立学園中学校3年	19
私らしいマイライフ	
前田 美空 自修館中等教育学校3年	20
かわいそうではない	
山田 玲安 横浜山手中華学校中学部2年	21
手紙の長所	
萬木 花梨 厚木市立睦合中学校3年	22
参考	
「中学生の主張 in かながわ」入賞候補作品一覧	23
「第47回少年の主張全国大会～わたしの主張2025～」内閣総理大臣賞受賞作品	
「伝える」	
谷口 鉄馬 鳥取県 鳥取市立桜ヶ丘中学校3年	24
◆実施概要	25



神奈川県立相模原中等教育学校2年 坂本 咲紀さん

—今回の作文を書いたきっかけを教えてください。

(坂本さん)

多様性が謳われている時代で「普通」ということの意味について、より考えるようになったからです。

—この主張をどんな人に届けたいですか。

(坂本さん)

「私は人に流されない」「私は自分の意見がない」など、色々なことを思う全ての人に届けたいです。気づかぬうちに、周りに合わせてしまっている人、自分の意見が強すぎる人など、世界にはたくさん的人がいます。そんな人達に、「普通は案外大したことない」と伝えたいです。

—今回の発表大会の参加を通して、これからどんな人生を作り上げていきたいですか。

(坂本さん)

人との調和を保ちながらも、しっかりと自分の意見を持ち、人に流されない人生を作り上げていきたいです。

【作文指導をしていただいた、神奈川県立相模原中等教育学校国語科井澤先生へ】

—学校ではどんなことに気をつけるよう、指導をしましたか。

(井澤先生)

広く社会問題に目を向けること、興味関心をもった社会問題を自分事としてとらえたうえで意見を述べるよう指導しました。

—毎年たくさんのご応募をいただいていますが、学校でどのように取り組んでいますか。

(井澤先生)

前期生のうちは毎年弁論大会を行っており、その活動の一環として活用させていただいております。私自身、相模原中等教育学校に着任して3年目という身であるため、前期生を担当されている他の国語科の先生方からご助言をいただきながら、生徒と共に勉強する気持ちで取り組んでおります。

—ご協力いただき、ありがとうございました。

取材者 神奈川県立青少年センター指導者育成課職員

最優秀賞（神奈川県知事賞）

空気よりも、自分の声を

神奈川県立相模原中等教育学校 2年 坂本 咲紀



「普通はこうじゃない？」

この言葉を、私はこれまでに何度も耳にしてきました。何気ない一言に思えるかもしれません、私はこの言葉を聞くたびに、「その普通はいったい誰が決めているのだろう。」と疑問を感じます。私たちが何かを選ぶとき、自分の考えよりも普通に合わせてしまうことがあるのは、なぜでしょうか。

小学生の頃の出来事を今でもよく覚えています。クラスで学級レクリエーションの内容を決めることになり、最終的に「鬼ごっこ」と「ドッジボール」が候補に残りました。私はボールを投げたり受けたりするのが得意ではなかったので、鬼ごっこの方に手を挙げようと考えていました。ですが、投票が始まると、周りのほとんどがドッジボールに手を挙げました。「一人だけ鬼ごっこにしたら浮くかも。」と思い、気づけば自分の手もそっとドッジボール側に挙がっていました。

その時、前に座っていた男の子が「まあ、普通はドッジボールだよな。」とつぶやきました。その一言が胸に引っかかりました。後でよく考えてみると、私は「自分がどうしたいか」ではなく、「みんながどうしているか」で行動していたのです。もしあの時、正直に鬼ごっこに手を挙げていたら、「え、鬼ごっこ？」と笑われていたかもしれません。でも、心から楽しめたかもしれないし、自分の気持ちに正直でいられたと思います。

「普通」という言葉を辞書で調べると、「ごくありふれたこと。当たり前であること。」と書いてあります。しかし、どこまでがありふれていて、何が当たり前なのでしょうか。それは時代や国、文化、環境によって大きく変わるものです。

例えば、明治時代までの日本では、「男は外で働き、女は家庭を守る。」という考え方が普通とされていました。ところが、今では女性も社会で活躍し、家庭のことを夫婦で分担していても違和感はありません。また、大正時代から昭和初期にかけては、左手で字を書くと「しつけが悪い。」と言われることがありました。学校では無理に右利きに直すように指導されることもあったと聞きます。しかし現在では、左利き用の道具も増え

左利きであることを否定されること少なくなりました。昔の普通は、今では偏見とされることもあるのです。

このように、「普通」とは決して揺るがない価値観ではなく、その時代や集団の中で多数派が持っている考え方や行動のことなのだと気づかれます。つまり、普通は人がつくるものであり、それ自体が変わっていくものなのです。

日本の社会では特に、「まわりと同じであること」に安心感を抱く人が多いように感じます。「目立たないように」「はみ出さないように」と自然にふるまっている人が多く、違った意見や行動をとると、「空気が読めない」「普通じゃない」と言われることもあります。ですが、本当に大切なのは、みんなと同じでいることなのでしょうか。

確かに、協調性や思いやりは、人と関わる上で大切です。みんなが気持ちよく過ごすためには、ある程度のルールや共通の行動が必要なこともあります。ですが、「みんなと同じでなければいけない」という空気が強すぎると、本当の自分の考え方や気持ちを出せなくなってしまいます。誰もが「浮くこと」を恐れ、言いたいことを飲み込んでしまう。そんな空気が、かえって人との距離を広げてしまうこともあると思います。

私はこれから、「普通」という言葉にとらわれすぎず、自分の気持ちや考えを大切にしたいと思います。あのレクリエーションの時の自分を思い出すと、今でも少し悔しい気持ちになります。ですが、その経験があったからこそ、「普通とは何か？」と考えるきっかけを得ることができました。もしこれからまた、同じような場面に出会ったときには、まわりの空気に流されず、自分の本当の気持ちを大切にしたいと思っています。人にはそれぞれ異なる経験や感じ方があって、それがその人の普通なのだと思います。

違いを認め合える社会、みんなが自分らしくいられる環境は、少しずつ私たちの手でつくっていけると信じています。私もその一歩として、勇気を持って自分の意見を言い、自分にも他人にも正直でいられるような生き方をしていきたいです。

優秀賞（神奈川県教育長賞）

人と人で繋がる伝統

神奈川県立相模原中等教育学校 1年 阿部 慎之助



てんてん てんすくすってん……

お祭りや行事を盛り上げるお囃子。笛や締太鼓と言われる小さめの和太鼓などを使って演奏する日本の伝統芸能の一つだ。みなさんも一度は見た事があるのではないだろうか。全国各地に古くから存在し、地域色豊かな事も特徴の一つだ。今、こうした日本の伝統が失われ始めている。

僕は今年から、地域のお囃子保存会に所属して、お囃子の稽古を始めた。

元々は小学一年の頃から、長胴太鼓と言われる大きめの和太鼓の演奏を教わっていた。長胴太鼓では、盆踊りの太鼓を基本とし、最近では太鼓だけでの演奏やパフォーマンスなど、新しいものを取り入れた事で注目されるようになり、叩き手もとても増えた。

しかし、お囃子はまたそれとは別のものだ。その歴史はとても古く、江戸時代ごろにはお祭りになくてはならない存在であったと言われている。お囃子は新しく変化させていくものではなく、昔から残る伝統を受け継いでいくものだ。今、その担い手不足に直面している。

稽古に参加してみると、驚きや不安の連続であった。

まず、笛を吹ける人は一人しかいない。そして、他の地域から招いていた。

さらに、太鼓を叩ける人は数人。お年寄りの方と他の地域の方だ。想像以上に、担い手がない事を実感した。

稽古では、「てんやすけてん てれすくす」などと、聞きなれない言葉やリズムが並ぶ。目で見て覚え、耳で聞いて覚え、口に出して覚え、体で覚えていくしかない。想像していたよりもはるかに難しい。ずっと畳に座っているので、慣れずに足も痺れる。本当に自分が叩けるようになるのか不安にもなった。

けれど、保存会の方々は熱心に優しく教えてくれた。そして、たくさん褒めてくれた。僕はよく見て真似で叩いてみたり、小さな事でも質問してみたり、何度も何度も叩いてみたりするうちに、次第に体で自然とお囃子のリズムが刻めるようになって

いった。まだまだ完璧には程遠いけれど、だいぶ形にはなったと思う。

ふと、僕の知らないずっと昔の人たちが叩いていたお囃子を、今自分が叩いているという事に胸が熱くなった。このお囃子を絶対に途絶えさせたくないと強く思った。まだ見ぬ未来へと繋げたいと感じた。

僕たちの暮らす今世の中は、便利なものや楽ができるもの、華やかで刺激的なものがたくさんある。

例えば、スマートフォン一つあればお店に行かなくても買い物ができ、映画館や舞台に行かなくても動画が見ることができる。

その一方で、人と人との繋がり、地域との繋がりは薄れて、伝統文化などの習得に時間がかかるもの、地味で古い物は注目される事がなく、ひっそりと姿を消していく。その存在すら知らない人もいるだろう。

伝統を受け継いでいく事は簡単ではないのだ。そして一度途絶えてしまうと再び蘇らせる事はとても難しいと言われている。

様々な年齢層の人たちが共通の目標に向かって取り組む事は、単純な事ではない。しかし何よりも、人と人、さらには地域との絆を深める事ができる。家庭や学校だけでは経験できない充実感や喜びを味わう事ができるものだと思う。

どうしたらこの先もこの伝統を守っていけるのだろうか。まずは自分が経験してみなければ始まらない。僕がこのお囃子を受け継ぐことで、どこかで若い人たちの目に留まり、お囃子というものを知ってもらえるかもしれない。やってみようと思う人が出て来てくれるのは、その先の事だと思う。

僕はこれからずっとお囃子を続け、たくさんの人に出会いたい。人と人との繋がりこそが、この伝統を繋ぐ唯一の手段だと考える。

顔も名前も知らない昔の人たちが一生懸命に伝えてきたこのお囃子を、顔も名前も知らない未来の子供たちへ繋いでいけるように。

優秀賞（神奈川県福祉子どもみらい局長賞）

「妹が教えてくれたこと」

神奈川県立相模原中等教育学校 1年 高田 まゆ



私の妹のみゆは、生まれつきダウン症という特性をもち、知的障がいがあります。そこで私は、この作文を通して伝えたいことがあります。それは、ダウン症や知的障がいについて理解を深め、そのような特性をもつ人に対して、偏見や差別をせず公平に接してほしいということです。そして、障がいがある人だけでなく、現代社会を生きる全員が、お互いを尊重し合える温かい社会になってほしいと、私は思っています。

まず、ダウン症や知的障がいについて説明します。ダウン症は、生まれつきの染色体の変化によって起こる特性で、日本ではおよそ千人に一人の割合で生まれると言われています。特徴として、顔立ちや体の発達に共通点が見られることが多く、知的障がいをともなう場合も多くあります。知的障がいとは、主に十八歳までの身体や頭脳の発達の過程において、知的な能力や、生活する力の発達が、同年代の子達に比べて遅れている状態のことを言います。学習内容を覚えるのに時間を要したり、相手の言葉を理解するのが困難だったりすることがあります。また、気持ちを言葉にして伝えることが苦手で、大きな声を出し、体を大きく動かして反抗してしまい、驚かれることもあります。しかし、それはその人の個性でもあり、周りの私たちが教え方を工夫すれば、少しづつ成長していくのです。

確かに、障がいがある人は「できないこと」が目立つかもしれません。しかし、「得意なこと」がない人間など、一人もいないと思います。みゆは記憶することが得意で、毎日いくつもの子供のうたを覚えて歌っている姿を見ると、とても明るい気持ちになれます。このように、できないことがあって得意なこ

とがあるのは、人間皆同じです。よって、障がいという言葉に重点をおくことは、その人の一部しか見ていないことになると思います。また私は、「障がいがある人は可哀想」という言葉を耳にしたことがあります。しかし私は、絶対にそんな風には思いません。なぜなら、幸せな家庭に生まれ、深い愛情をうけ、素直にまっすぐ育ってきたみゆの顔は、いつも幸せな表情をうかべているからです。私たちはつい、「普通」という基準をつくり、そこから外れると、「違う」「変」ときめつけてしまいがちです。しかし、そもそも普通とは何なのか、誰が決めたのかなんて誰にも答えられません。人それぞれ得意なことや苦手なことがあります、できることやできないこともあります。だからこそ、障がいを「特別」だと思って線を引くのではなく、個性として認めることが大切です。更に障がいがある人から学べることも多くあります。みゆは、自分を人と比べて落ちこむことがありません。人より明らかに劣っていても、笑顔を絶やさずひたむきに頑張る姿を見て私は、自分なりに頑張る大切さを学びました。

みゆは、私にとって本当に大切な存在です。障がいがあるからといって特別なわけではなく、共に成長し、互いに学び合えるかけがえのない家族です。また、障がいがある人を目の前にすると、一線を引いてしまう気持ちもわかります。そんな時は、どこか尊敬できる部分を見つけてみてください。障がいがある人だけでなく、世界中の全員がお互いを尊重し、認め合うことができれば、みゆをはじめとする障がいがある人みんなが、もっと生きやすい世の中をつくっていけるのではないかでしょうか。

優秀賞（神奈川新聞社賞）

未完成の僕らだから

神奈川県立相模原中等教育学校 2年 木下 悠誠



中学1年生の冬。僕は学校休みがちになった。きっかけは発熱と嘔吐を伴う風邪で学校を欠席したことだった。激しい嘔吐を二回。ぐったりと疲れ果てた。僕の胃の中身はすっかり空っぽになった。そして、僕自身もなぜか空っぽになってしまった。思考停止。僕は心と身体がバラバラになる初めての感覚を覚えた。

次の日もまだ風邪の症状が残っていたので学校を欠席した。僕の心は学校を休めることに正直ホッとしていた。明日も明後日も、体調が回復したとしても「休みたい。行きたくない。」と強く思っていた。しかし、幸か不幸か、風邪は長引かなかつた。その日の夕方くらいには熱も下がり、食欲も戻り、好きなテレビ番組を見て笑って過ごし、夜はぐっすりと眠ることができた。ところが、朝を迎える、身支度を整えて玄関で靴を履こうとすると胸がぎゅっと苦しくなり、「今日はまだ無理」と身体が学校へ行くことを拒否した。学校へ行くことを考えると頭痛や喘息の発作も出るようになり、それらはしばらく続いた。両親からは

「学校で嫌なことがあるのか。」

「友達関係に悩みがあるのか。」

「学習面に不安があるのか。」

「部活動が合っていないのではないか。」

と矢継ぎ早に質問をされた。しかし、僕の答えはいつも「ノー」だった。どれも当てはまらず、ただ首を横に振って答えるしかなかった。

「どうして学校に行けないのか。はっきりとした理由があるだろう。言葉にしないと伝わらない。」

と言われたが

「僕にもわからない。」

と答えるしかなかった。本当にわからなかった。ただ頭がモヤモヤとし、自分の感情や状況を的確に表現して伝えることができなかった。このまま一日、一日と欠席が続いていけば、学習面に遅れが生じる。部活動では自分一人の問題ではなく多くの人

達に迷惑をかけてしまう。両親が心の底から心配している様子も感じる。早く体調を戻さないと、と大きな不安と焦りを感じていた。しかし、その反面、自分と向き合う時間もしっかりと取りたいと思っていた。心も身体もすっかり弱ってしまった自分と向き合うことは大変だったが、その中で僕が気づいたことは「心と身体はつながっている」ということだった。

中学生になり、僕は勉強も部活動もいつも「全力」だった。少しくらいの疲労は忙しいのだから当たり前のこと、足りない時間は睡眠時間を削れば良い、と知らず知らずのうちに無理を重ねていた。振り返ると、その頃から喘息の発作が出来やすくなり、頭痛にも悩まされていた。僕は身体の声を受け、辛い症状は薬で抑え対応していた。しかし、そこには心も必死でブレーキをかけようと声をあげていたのだ。身体の疲労がいつの間にか心の余裕を奪っていた。僕が身体と心の両方の声を聞かなかつた結果が今回の「心身の悲鳴」となって現れたのではないだろうか。じっくり休む。しっかりと休む。簡単なことのようで、とても難しい。僕はできていなかった。生活を見直し、身体の状態を整えること。時には立ち止まり休息を取ること。僕はこれらが心を回復させやすくすることに気づくことができた。僕の中でカチャカチャと音を立てて何かがはまつたような感覚がした。明日は学校へ行こう。決めたら進むしかない。迷いながらも進もう。

理由がはっきりとわかった上で学校を休む人もいるだろう。僕のように理由が自分でもわからないまま学校を休む人もいるだろう。僕はどちらも否定をせず「休むこと」を認めてほしいと思う。未完成の僕らが「休むこと」は単純なことではないから。体調不良や気分の落ち込みが続くと自分に自信が持てなくなり投げやりに過ごす日も増える。しかし、それは僕らのこれから先の長い人生のほんの一瞬のこと。投げやりになってしまって投げ出していなければ大丈夫だと、自分にも誰かにも寄り添える人に僕はなりたい。

優秀賞 (NHK 横浜放送局長賞)

「ちょっとの勇気、ちょっとの親切」

横浜市立南高等学校附属中学校 1年 渡邊 このみ



「あなたは、困っている人を見かけた時、ほんの少しの労力や時間を使って、人助けをすることはできますか。」

この質問に「できる」と答えられる人は、どれくらいいるのでしょうか。荷物が多くて困っている人。ベビーカーを持ち上げて階段を登っている人。こんな人たちを見かけた時、

「手伝いましょうか。」

と声をかけられるでしょうか。きっと見て見ぬふりをし、通り過ぎてしまう人が大半ではないでしょうか。多くの人の心にはおそらく、「知らない人だし。」「自分が声をかけなくても別にいいだろう。」という気持ちがあると思います。

私は、この夏休みに美術館のワークショップのボランティアに参加しました。会場近くのバス停は日陰がなく、バスも1時間に2本しか通らない状況でした。ある日、日傘を忘れてしまった私は、汗だくになりながら、なかなか来ないバスをひたすら待っていました。すると、隣にいた女性が、

「よかつたら日傘に入りませんか。熱中症も怖いですし。」と優しく声をかけてくれました。私はとても驚きました。私は日傘に入れてもらいうながら、見ず知らずの私を心配し、勇気を出して声をかけてくれたことが嬉しく、こんなに優しく親切な人がいるのかと、とても感動し、心が温かくなりました。

私が参加したボランティアでも、素敵な出会いがありました。私は、ワークショップである少女に会いました。彼女は何回絵を描いてもうまく書けず、苛立っていました。私が代わりに絵を描いてあげると、とびきりの笑顔になり、それを見ながら作品を作り上げることができました。私が描いた絵を大事そうに握りしめ、

「お姉さん、ありがとうございます。」

と言って会場を後にしていました。

私は2人の出会いを通じて、心を寄せ、相手を思いやる気持ちの先には、誰かの笑顔があることに気づきました。そして、その行為はささやかな気遣いと勇気であると気づかされました。だからこそ、「困っているな。」と感じたらすぐ動くようになりました。海でプラスチックの袋やごみを見つけたら、すぐに拾うようになりました。以前は、「どうせ誰かがやってくれる。」と思って素通りしていました。しかし、もし、みんなが

同じように「きっと誰かがやってくれる。」と思ってそのままにしていると、きっと海はごみだらけになります。だから、気づいた時に行動しなくてはいけないです。誰かがちょっと心を寄せることで、助かる人がいます。その人が笑顔になります。感謝している人がきっといます。自分の行いは、どこかで誰かの役に立っているはずです。

しかし、行動する時には勇気が必要です。困っている人を見かけても、声をかけるのは誰でも躊躇するものです。私もそうでした。しかし、困っている時に人から親切にされ、助けられた経験があると、「次は自分が誰かの為に何かをしよう。」「私と同じような思いを持ってもらいたい。」と思うようになることにも気づきました。

「ボランティア」は基本的に無償の奉仕活動です。そこに、どんな価値があるのかと問われたら、私は誰かの為に行うことだけでなく、その行いは、自分の為になっていると答えます。私は、誰かを手伝った時に、感謝されると嬉しくなります。そして、自分が誰かに必要とされたと感じると、自分の存在意義を感じます。だから、報酬などの見返りがなくても、自分の心が温かくなれるのです。私が参加したボランティアでは、参加者が皆、常に笑顔で、楽しそうに活動しているのがとても印象的でした。

今は、自分の為だけに時間やお金を使う人が増えていると聞きます。自分さえよければいいという考え方が広がっていました先には、冷たい社会が待っています。弱い立場にある人は、切り捨てられていくのではないでしょうか。人は、社会の中で生き、暮らしています。様々な立場の人があります。どんな人でも安心して暮らせる社会を目指すには、助け合う精神が必要です。どんな人も生きていれば、必ず人と関わり、知らないところで誰かに助けをもらっています。社会の中で、人は寄り添い合って生きています。

「情けは人の為ならず」ということわざがあるように、誰かにしてあげたことは、広がり、巡って、今度は自分が助けられ、戻ってきます。その輪がどんどん広がることで、世の中は平和になり、人々が暮らしやすくなるのではないでしょうか。そのような社会を皆で一緒に作っていきませんか。

優秀賞 (t v k かながわ MIRAI 賞)

優しさのバトンをつなぐ

鎌倉女子大学中等部 1年 まるた ふうか



「席、どうぞ。」

「座りますか？」

この言葉を、私は掛け続けると決めている。

私は中学生になってから、毎日電車に乗って学校に通っている。以前大きな荷物を抱えたおばあさんが乗ってきた時に私はすぐに席を譲ったが、まわりの人は動く気配がなかった。電車に毎日乗るようになってから半年ほど経つけれど何度もかそんな場面があった。頭の中で譲るか、どうしようかと迷っていても、実際に行動を起こす人は少ないと感じた。私は、お年寄りや妊婦さん、大きな荷物を持っている人が乗ってきたら、すぐに席を譲るようにしている。それは、私にはとても心に残っている思い出があるからだ。

私は小学二年生の時に、タイに行ったことがある。私が家族と電車に乗りると、私たちが乗り込んだ瞬間に、座っていた現地のたくさんの人たちがシッパと立って笑顔で席を譲ってくれた。日本でそんなシーンに出会ったことがなかったのでとてもびっくりした。と同時に、慣れない場所で歩き回って足が棒になっていた私は、座れることが本当にありがたかった。そして彼らの満面の笑顔を見てこちらも自然と笑顔になり、心が温まった。両親もすごく嬉しかったようで、タイの思い出話をしていると必ずその話が話題に上がる。あの時の温かい気持ちは、五年経って中学一年生になった今でもはっきりと覚えている。

席を譲ってくれたタイ人は、日本人の子どもに席を譲ったことなんて覚えていないだろう。あの素早さ、自然さから考えて、きっと彼らにとって子どもに席を譲るということはごく当たり前のことであり、日常茶飯事なのだ。それはなんて温かく、素晴らしい習慣なんだろう。譲った側にとっては大したことでもなくとも、譲ってもらった側は、その時の嬉しさを忘れない。そして逆の立場になった時に今度は自分が譲ろうとする。優しさが温かさでつながっていく。

でもそれだけでは足りないということに、最近私は気がついた。2020年度の国土交通省の調査によると、「あなたは普段、

公共交通機関で優先席に座りますか」という問い合わせに対し、1000人近くの回答者のうち、「ほとんど座らない」と答えた人が五割近くいるが、「時々座る」と答えた人が約三割いた。私も、普通の座席が空いていない時は時々優先席に座ることがあった。

ところがつい最近、私の仲の良い友だちが持病を持っており、心臓に10ミリメートルの穴が空いていることを知った。とても元気な彼女とそんな大変なことが全く結びつかず、打ち明けられた時とてもびっくりした。見た目では何も分からなくても、本人しか知らない事情を持っている人がいるのだということを目の当たりにして、頭をなぐられたような気持ちだった。とても元気そうに見えて、実は心の病気があったり持病を持っていたりする人がいるのだ。

しかし、そういった人たちの事情は、見た目だけでは判断できず、本人から聞かないと分からない。だからこそ、優先席にそれを必要としている人がいつでも座れるように、優先席には座らないようにしなければと思った。友だちの話を聞いてからは、どんなに疲れていて座りたくても、一度も優先席に座っていない。

電車での出会い、関係性は多くの場合一回きりだ。見ず知らずの人に譲っても譲らなくても、自分の生活は何も変わらないし、自分がやらなくても、きっと他の誰かが譲るだろう。迷って行動を起こせない人には、そういった考えが頭の片隅にあるのかもしれない。でも、たった一言の「どうぞ」「座りますか」という言葉が、誰かをほんの少し助けることができるなら、人を幸せな気持ちにできるなら、私は「どうぞ」と声を掛け続けると決めている。たとえ断られるとしても、役に立てる可能性があるなら、一步踏み出して声を掛ける。たとえ重たい荷物を持っていても、優先席には座らない。そういう優しさのバトンがあちこちでつながっていけば、世界はもっともつと温かく優しくなるだろう。あの日のタイの人たちの笑顔が、私を動かし続けている。

優秀賞（神奈川県青少年育成アドバイザー連絡協議会会長賞）

「世界初」と「最後」の都市

横浜共立学園中学校 3年 石川 虹空



戦争と聞いて、何を思い浮かべるだろうか。私が真っ先に思い浮かぶのは、太平洋戦争だ。なぜなら、広島と長崎の原爆投下のイメージが強くあるからだ。

まず、原爆とは原子爆弾の略で、核兵器の一つだ。核兵器は原子の核分裂や核融合という反応を使って、大量のエネルギーを爆発として発生させる兵器だ。核兵器を使うと、都市を壊滅できるという。そんな恐ろしいものが80年前の日本に実際に投下され、その年のうちに、広島と長崎、合わせて21.4万人もの命が奪われた。私は21.4万人という数が、私の住んでいる戸塚区の人口とほとんど同じだったことに驚いた。

広島や長崎では、爆風にさらされてすぐに亡くなった方もいれば、何年もして後遺症によって亡くなった方もいたそうだ。

では、なぜ原爆投下が起きたのだろうか。アメリカはヨーロッパにおいて、戦後を見据えた主導権をめぐってソビエト連邦と対立していた。そんなアメリカはソビエト連邦に原爆の威力を見せつけ、軍事的優位性を示そうとしたと考えられている。

一般市民への無差別攻撃は、当時としても戦時国際法違反として問題視されるものだった。当時の日本政府は「無差別性、残虐性を有する本件爆弾を使用せるは人類文化に対する新なる罪惡なり」「非人道的兵器の使用を放棄すべきことを嚴重に要求す」とアメリカに抗議している。

一方で、アメリカをはじめ、日本の統治下や占領下にあったアジアの国々では、原爆が戦争を終わらせ、結果として多くの人の命を救った。原爆が日本の支配から解放したと、多くの人が考えている。

私がこのテーマで作文を書こうと思ったとき、海外で幼少期を過ごした母からこんな質問をされた。

「広島と長崎に原爆を投下したことは正当化できると思う？」
「できない」

私はそう答えたが、母がなぜその質問をしたのか、不思議だった。しばらく考えていると、母はアメリカと日本では原爆投下の捉え方が異なることを説明してくれた。

「アメリカでは原爆投下は、仕方なかったと教えられる。アメリカ側はこれ以上日本が戦争を続けるなら、原爆を落とすと通達している。教科書には、このまま戦争を続ければ本土決戦は避けられない。アメリカの若者をこれ以上犠牲にしないために、原爆投下は避けられない」と書いてあるんだよ。」

私はそれまで日本が被害者というイメージを強く持っていた。母の話を聞いて、どちらが悪いか、どうするべきだったのか、断定することは難しいと思った。

戦後しばらくして、国連では核兵器のあり方について話し合いか行われた。その結果、核兵器の開発、保有、使用を禁止する国際条約、「核兵器禁止条約」が2017年に採択され、2021年に発効された。

この条約が発効されてから4年がたつが、今なお核兵器を保有している国は、長崎大学核兵器廃絶研究センターの調べでは9ヶ国。実際に使うことができる核兵器の数は、なんと9615発にのぼる。しかも、増加傾向にあるそうだ。

最後に、山口彌氏を紹介する。8月6日、出張で広島市に来ていた彼は、爆心地から約3キロメートル離れた場所で被爆。左鼓膜が破れ、左上半身に大やけどを負った。大けがをした状況でも家族が心配になり、その状態で300キロメートル以上離れた故郷、長崎に向かったそうだ。そして長崎でも被爆し、二重被爆となった。

そんな彼は2010年、93歳で亡くなるまで核兵器廃絶を訴えた。彼が亡くなる10日ほど前、ジェームズ・キャメロン監督が彼のもとに訪れ、「核兵器を二度と使ってはならない」というメッセージを伝えるため、被爆をテーマにした映画を作りたいと構想を話した。それを聞いた山口氏はこう言った。

「私は役目を果たしました。あとはあなたに託したい。」

広島が「世界初」という事実は変わらない。しかし長崎が「最後」であり続けられるかどうかは、今に生きる私たちにかかる。

私は歴史を正しく知り、様々な視点から考えられる人になりたい。

奨励賞（神奈川県立青少年センター館長賞）

世の中は点数が全てなのか

慶應義塾普通部 2年 ^{あまの} 天野 ^{りく} 瑞久

「勉強しろ。」

「テストでいい点を取れ。」

…大人たちが口を揃えて言う。僕は、この言葉を聞くたびに嫌になる。世の中は点数主義になっていないか。学校は、どの教科も成績のほとんどがテストの点数で決まる。体育さえ、技や特殊な技ができるかできないかで成績が決まってしまう。何でもできるヒーローみたいなやつは何とも思わないかもしれないが、僕自身はこのシステムに非常に苦戦している。

僕が通っている学校は附属校で、この夏休みも、とにかく勉強するようにと言われてしまった。しかし、言われれば言われるほど、なぜかやる気がなくなっていく。勉強が大事だということもわかるけど、僕にはどうしてもやりたいことがあった。それが、スタジアムの模型作りだ。

僕の学校では、秋に「労作展」という一大行事が開催される。これは、生徒一人一人が興味のある分野を研究し、展示することを目的としている。僕はその展示会で、構造が複雑でとても難しい『サンティアゴ・ベルナベウ』という、スペインにあるスタジアムの模型を作りたいと、ずっとずっとと思っていた。しかし、勉強に苦戦している僕に対して、模型を作る時間はないという意見もあり気持ちが沈んでいた。やっぱり無理かと諦めかけたが、考えるほどに、どうしても模型を作りたくなっていく。そこで、建築模型の祖父に相談してみると、

「人間が作り出した造形物なのだから、作れないものはないよ。せっかくだから挑戦してみたら？」

と、超名言を放ってくれたのである！！これはやるしかない感じ、何があろうとも模型作りを成し遂げようと思った。

まずは、ベルナベウの構造について調べることにした。しかし建築に関する資料はゼロ。あったとしても、スタジアムの紹介動画や画質が悪い写真しか見つからなかった。そこで、祖父にも協力してもらいながら、限られた資料の中から摸索して、『サンティアゴ・ベルナベウ』についてとにかく調べた。ネット

で販売していた『3D パズル』にも挑戦した。少ない情報の中から、祖父と一緒に模型の設計図をパソコン上に作った。

そうしてついに完成した設計図は、僕が描く適当な設計図とは違い、一つ一つのパーツが組み合わるように緻密な計算がされていて、その凄さに驚いた。また、瞬時に構造を理解できるプロはかっこいいとも思った。

完成した設計図をもとに、3mm のホワイトパネルを利用して、カッターナイフで一つ一つのパーツを切り抜き、組み合わせていった。全部で二百個以上のパーツを組み合わせるのは大変だったけど、夢中に作業をしているといつもつい気になってしまい、携帯電話のことやサッカーのことが、全く気にならないほどであった。全ての工程を終えるのに丸5日間もの時間がかかったが、頑張った成果が作品に表れ、僕は感動してしまった。

この模型作りを通じて、僕は、不可能なことを可能にする経験の大切さと、達成感を学んだ。そしてこの学びは、点数を取るための学びではなく、物事を成し遂げるための学びとして重要なのではないかと感じたのだ。

現在、勉強に限らず、スポーツや SNS なども『点数主義』の傾向があるのではないか。確かに、スポーツは点数が取れないと結果として成り立たない。SNS もフォロワー数や視聴数が多い方が良いだろう。しかし、数字や結果に囚われるあまりに、それがプレッシャーとなり、スポーツが好き・動画編集が好きといった、シンプルに目の前のことを楽しむという純粋な気持ちが失われてしまうのではないかと思う。

一方で、今回の模型作りの経験を通じて、自由に好きなことだけをやるというのも違うと思った。例えば、計算力がなければ設計図は完成しないし、少ない情報からアイデアを絞り出すためには理解力が必要である。つまり、自由に好きなことをするためにも、『勉強』が必要だということなのだ。

時に、いい点数を取るというシステムも大切かもしれないが、それだけに囚われず、将来に活用できる学びを意識しながら、学校生活を充実させることができること重要なのではないか。

奨励賞（神奈川県立青少年センター館長賞）

海の輝きのために

神奈川県立相模原中等教育学校 2年 佐藤 和馬

夏休み、家族と久しぶりに海へ行きました。小さい頃から夏は海、と言うくらい海が大好きで、砂浜で遊んだり、きらめく水面を眺めたりするのが本当に楽しみでした。でも、今年の夏は、少し違いました。

車から降りて、潮風の香りを胸いっぱいに吸い込む。あの懐かしい香りに、心が弾みました。しかし、砂浜に足を踏み入れた瞬間、その期待は少しずつ崩れていきました。遠くから見ると、青く輝いて見えた海は、よく見るとごついて、透明度がありません。そして、砂浜には、どこから流れてきたのかわからない、無数のゴミが散乱していました。

ペットボトル、レジ袋、お菓子の袋、タバコの吸い殻。それらのゴミは、波に打ち寄せられて、砂の中に埋もれかけたり、岩の間に挟まったりしています。まるで海が、私たちが捨てたゴミを、そのまま吐き出しているようでした。

私は、これまでに見たことのない海の姿に、ただただショックを受けました。

それまで、海の汚染という言葉は、教科書やニュースの中でしか聞いたことがありませんでした。遠い外国のどこかで起きている、私とは関係のない問題だと、無意識のうちに決めつけていたのかもしれません。でも、目の前に広がる光景は、紛れもない現実でした。それは、どこか遠い国の人人がしたことではなく、私たちと同じようにこの地球で暮らす人々が、無責任に捨ててきた結果なのだと、強烈に感じました。

波打ち際で、透明なビニール袋が、クラゲのようにゆらゆらと揺れているのが見えました。それを、まだ幼い子どもが「わあ、クラゲだ。」

と言って、無邪気に指をさしていました。その姿を見て胸が締め付けられるような気持ちになりました。ビニール袋を本物のクラゲと見間違えて、食べてしまう生き物がいる、という話を聞いたことがあります。そのビニール袋も、もしかしたら、魚やカメが食べてしまうかもしれない。そう思うと、本当に、心が痛みました。

この旅行をきっかけに、プラスチックは、海の中で細かく碎かれ、目に見えないほど小さくなつて、マイクロプラスチック

と呼ばれるものになること。このマイクロプラスチックは、魚や貝に取り込まれ、それを食べる私たち人間の体にも入ってくる可能性があること。つまり、私たちが捨てたゴミが、回りまわって、私たちの体に戻ってくるということを知りました。

コンビニでもらうプラスチックのスプーンやフォーク、自動販売機で買うペットボトル飲料、スーパーで買うレジ袋。これらは、とても便利で、当たり前のように使っています。しかし、その便利さの裏側で、地球の海は少しずつ、悲鳴を上げているのかもしれません。

海の汚染は、単に景観を損なうだけの問題ではありません。それは、地球の生態系全体を破壊し、そして最終的には、私たち自身の健康にも影響を及ぼす、とても深刻な問題なのです。海の生き物たちは、私たちのゴミによって命を脅かされています。海は、地球の酸素の半分以上を作り出していると言われています。その海が汚れてしまえば、私たち人間も、安心して生きていいくことができません。

この問題は、私たち一人ひとりが、自分事として考えるべき時が来ているのだと思います。大きなことをする必要はありません。まずはできることから始める。例えば、マイボトルやマイバックを持ち歩くこと。使い捨てのプラスチック製品を、できるだけ買わないように心がけること。そして、何よりも大切なのは、ゴミをきちんと分別し、絶対にポイ捨てをしないことです。

私たちの小さな行動が、未来の海を守ることにつながります。私たち一人ひとりに意識が、海を、そして地球全体を変えていく信じています。

あの海で感じた衝撃は、私にとって、忘れられない大切な学びとなりました。たくさんの生き物たちが、安心して暮らせる海であつてほしい。そのため、私たちは、これからもできることを続けていくべきだと思います。

海の輝きは、地球全体の宝物です。その宝物を守るために、今、私たちにできることを、一緒に考えてみませんか。

奨励賞（神奈川県立青少年センター館長賞）

検索じゃ出てこない考え方

横浜共立学園中学校 3年 佐藤 漩

わからないことがあれば、すぐに調べる。私たちは、そういう時代に生きている。たとえると、数学の宿題で出てきた問題、社会のレポートで必要なデータ。気になっていた漫画の結末。どれも、スマートフォンがあれば一瞬で答えが見つかると思う。便利だし、効率も良いと思う。私も日常でよく使っているし、今のこの時代にはかかせないものだと思う。でも、最近ある出来事を通して、「検索じゃ出てこない考え方」の大切さに気づいたのだ。

それは、夏休みの宿題で将来の夢について考え、職業を調べるという課題が出了たときのことだ。私は正直、まだあまりやってみたいことなど無く、調べる内容もなかなか決まらなかったのだ。何となく、「人の役に立つような仕事がしたい」とは思っていたけどそれがどんな職業か、どんな意味があるのかなどははっきりとはわからなかった。そこで、私はいつものようスマホで「人の役に立つ仕事」「中学生に人気の職業」などと検索してみた。すると、医者、看護師、教師、消防士、カウンセラーなどの職業がたくさんきてきた。それぞれの仕事の内容ややりがい、必要な資格などもくわしく説明されていた。よむだけで、なんだか知った気になっていた。でも、そこから先が進まなかった。どれも立派な仕事だし、すてきだと思う。けれど、「これだ!」と思えるものはなかった。どれもどこか人の考え方で、「私の考え方」ではないように思えたのだ。その時、私はスマホをとじて少し考えてみた。私はどんな時に役に立てたと思うのか、私は何に対して心が動くのか。自分の過去を思い返してみた。そこで思い出したのは、小学生のころ、転校してきた子にずっと話しかけて、はやくクラスに馴染めるように手伝いをしたこと。中1の時、駅で体調の悪そうな人に勇気をして声をかけたこと。そういう、「相手のきもち」に気づいて、そつとよりそうようなこと」が私はうれしかったし、得意だと感じていた。それは、検索しても出てこなかった私だけの答えだった。

その経験から私は、「検索では出てこない考え方」の大切さを強く実感した。検索すればたくさんの情報が出てくる。それは

他のだれかが書いた言葉であり、だれかが感じたこと、だれかが決めた正解である。でも、そのまま使ってしまえば自分の考えは消えてしまう。たとえ、時間がかかったとしても、自分のきもちと向きあって、自分なりに考えて出した答えのほうがずっと価値があると思った。

そこから私は、何かをえらぶとき、すぐに検索することをやめてみた。「この問題の意図ってなんだろう。」「この意見、本当にそうかな。」そういうことは、検索では答えが出ないと思う。そこで検索せずに、自分の中で考えて、迷って、なやんで、それでやっと出てきた言葉、考えこそが、本当の自分の気持ちだと思うから。

今は情報があふれている時代だ。便利な一方で、私たちはその中にうもれてしまい自分の考えをもつ前に「だれかの答え」を信じてしまうことがある。動画や記事をひらけば、「これが正しい」「こうすれば上手いく」といった言葉がすぐにとびこんでくる。けれど、本当にそれが自分にとって正しいのかどうかは、だれにも決められない。最後に決めるのは、自分自身なはずだ。たとえば、私はよく友人や家族から相談をうける。こういうときに、「ネットにはこう書いてあったよ。」というのは簡単だ。しかし、それでは相手の気もちにはよりそえないと思う。大事なのは、その相手がどうしたいのかと一緒に考えること、つまり検索では見つからない「心の声」に向きあうことだと思う。

また、考えることをやめてしまうと、自分らしさもなくなってしまう気がする。みんなと同じ答えをコピーするだけなら、そこには「私」という存在はうつらない。たとえ少し遠まわりでも、自分で考えて選んだ答えの方がずっと自分らしくてほれるものになる。まちがったとしても、その経験が次につながる。情報に流されるだけでなく、自分でたちどまって「本当にそうかな」と疑うこと。そこから生まれる考えは、きっと私の人生を支えてくれると思う。

検索では出てこない、自分だけの考え方。私はそれを大切にして、これからも生きていきたいと思った。

奨励賞（神奈川県立青少年センター館長賞）

思い出の場所が世界とつながる日

たけもと あおい
鎌倉女学院中学校 3年 竹本 葵瑛

幼い頃よく遊んでいた空き地が、二〇二七年に横浜花博の会場になることを知らされました。昔、私が補助なし自転車に乗れるようになるために、転んでも痛くないからといつも両親に連れて行ってもらった、緑が生い茂る広大な土地です。その土地のうち約百haが花博の区域となるそうです。今でも自転車に初めて乗れた瞬間をよく覚えています。思い出のこの場所が、世界への発信地となるということにわくわくしました。

この夏休みにはちょうど大阪万博に出掛けて、たくさんの刺激を受けたこともあります。なおさら地元での博覧会という言葉に胸がおどります。大阪万博では、未来の技術や環境問題への取り組みを見て、これからの中にはこんなこともできるようになるのかと感銘を受けました。特に印象に残ったのは、「持続可能な未来」というテーマです。資源を大切にする工夫や、世界中の国の人々が協力して新しい解決策を考えているということを実感し、万博はただの展覧会ではなく、「みんながみんなの未来を考えるための場」などと強く感じました。それだけではありません。会場内外で働く多くの人の目の当たりにしました。みんな活気があり、丁寧に案内や誘導、清掃などをしてくれていて、とても快適に過ごすことができました。

そこで、国内だけでなく、海外から多くの人が集まるであろう会場に、近所に住む中学生の私ができることは何だろうと考えてみました。

花博に訪れた人たちが「この地域は自然を大切にしているんだ」と感じてくれたらとても素敵なことだと思います。まずはできることは、地域の清掃活動に参加し、花博開催前に周辺環境を整えることだと考えました。また、ボランティアとして、来

場者の案内やイベントのサポートを行うことで、花博を楽しく思い出深いものにする役割を果たせるのではないかと考えました。そして、近隣住民とのコミュニケーションを深め、花博に向けた情報共有や協力体制を築くことも大切だと思いました。

さらに、普段からの心構えとして、環境問題への関心をより高くすることも、花博を迎える市民として必要だと思います。気候変動の問題に対して、まず、日常生活での省エネルギーを心がけ、電気やガスの使用を減らすことが大切です。エアコンの温度調節などの節電を意識し、移動の際には、車に頼らず、徒歩や自転車を活用し、遠出は公共交通機関の利用を心掛けます。また、食生活では神奈川県内の食材を選ぶことで、輸送時のCO₂の排出量を削減できます。リサイクルやプラスチック削減も重要です。ゴミの分別の徹底、当たり前になりつつあるマイバッグも忘れることなく携帯し、資源を無駄にしないようにします。こうした小さな行動が積み重なり大きな一步となって、世界の人々の手本となり、花博を訪れる人にとっても、未来の瀬谷区にとっても意味のあることになるのではないでしょうか。

私はあの自転車の練習から何度も挑戦し努力するということの大切さを学びました。花博の会場になる場所も、きっとたくさんの人々が挑戦や発見をする場所となるはずです。だからこそ私自身も地域の一員として、美しい緑に囲まれた地元の魅力を発信し、花博を成功させるために、積極的に参加し、未来の花博をより素晴らしいものにする力になりたいです。そして、お世話になったあの場所へ、二年後高校生になる私ができる、私なりの恩返しができたらいいなと思います。

奨励賞（神奈川県立青少年センター館長賞）

戦争を知らない私たちへ

横浜市立生麦中学校 2年 田邊 ことみ

今年、二〇二五年、第二次世界大戦が終結して八〇年が経過しました。戦後八〇年に関する記事やテレビ番組を度々見かけ、「戦争とは何か」「平和とは何か」を改めて考えました。私たちが今、安心して毎日を送っているのは戦争後の八〇年があったからです。戦争というものを実際に見たことも、経験したことなどありませんが、八〇年たった今でも語り継がれているという事実が、戦争というものを風化させず、こうやって私たちが戦争について考えるきっかけとなっていると思っています。そこで、二つの問い合わせ立てて考えてみました。

一、加害と被害、私達はどちらの視点で戦争を語っているか？日本の戦争経験は「被害者」として語られがちですが、「加害」として歴史とどう向き合うべきか考えました。

日本は「被害者」でも「加害者」でもあります。日本が池国にしたこと、そしてされたことを初めて全体的に調べてみたのですが、改めて戦争の恐ろしさを再確認しました。この事実を知った上で日本が被害者だとか、加害者だとか、私が判断できるものではなく、誰かが個人の意見で無責任に主張するのはあまりにも不正確だと感じました。戦争という極限状態では、国や人は同時に両方の立場に立つことがあるのです。ただ、戦争という行為はこの解釈だけで終わってはいけないと思います。「どっちもどっち」のようなどちらにもなれる中途半端な視点で終わらせずに、もっとお互いの責任を分かち合うことが大切です。そしてその事実を決して風化させず、後に戦争をする行為を避けるために絶対に伝え続けなければいけないと考えました。

二、平和は当たり前なのか？平和が日常となった今、私たちは平和のことをどれだけ意識し、守る努力をしているか？

小さい頃からNHKの連続テレビ小説を見るのが好きで、今でも見ています。連続テレビ小説の歴史上の人物や昔の出来事についての物語に、必ず存在する描写があります。それは、戦争についてです。毎回戦争のことを見るのは辛いけれど、当時の人の悲しみや様々が分かる気がします。必ずしも当時の状況がテレビのドラマだけで分かるものではなくても、すごく悲しみが伝わってきます。このような形で実際、私たちのような後世に伝わっています。たとえ気持ちが薄れてしまったとしても、私たちが色々な形で後世に伝えていきたいと考えています。それが、今私たちができる唯一の事なのです。

平和そうに見える今の世の中でも、平和が当たり前とはいい切れません。ただ、今の幸せに、私たちは十分に感謝できているでしょうか？今でも、世界では戦争が続いている、私たちが住んでいる日本でも、厳しい財政や、安全保障の不安などが広がっています。それでも、幸せに暮らしていることを心から感謝したいです。当たり前のように学校に行けていること、ご飯が毎日食べられること、一人ひとりが好きなことができて、尊重されていること。どれも当たり前だと思い込んでいるだけで、本当はすごく幸せなことです。私たちは、過去の戦争についてもっと知るべきだと思うし、「平和が当たり前ではない」ということに気づけることが、今の戦後八〇年において一番大事なことなのかもしれません。「なんで戦争は起ったんだろう」「逆転しない正義ってなんだろう」というような問いこそ、私自身の気づきや気持ちへと変化し、戦争が一〇〇年、二〇〇年と語り継がれていくのです。一番大切なのは、今です。大いなる感謝をもって戦争というものを忘れることなく、一日一日を大事に過ごしていきましょう。

今この瞬間を生きること

横浜市立市ヶ尾中学校 2年 長井 麻衣果

私たちは、日々の生活の中で過去のことを思い出し後悔したり、また起きていない未来のことを心配したりすることが多い。けれども、実際に私たち生きているのは、今この瞬間だけだ。過去も未来も、私たちが頭の中で思い描いているだけの存在であり、本当に手にできるものは、つねに今しかない。私は、そのことを意識するようになってから自分の毎日が少しづつ変わってきたように思う。

たとえば、部活で走っているときのことを考えてみる。練習がきつくて、

「もう無理だ。これ以上走れない。」

と思う瞬間が時々ある。そんなときに、ダッシュがまだ何本もあると考えると、余計に苦しくなり疲れる。けれど、

「とにかくあと一步。一步だけ頑張ろう。」

と考えると、不思議と力が湧いてくる。未来のことばかりを考えよりも、目の前の一步に集中したほうが、前に進めるのだからした、小さな一步一步の積み重ねが、結局は大きな成果につながる基盤となるのだ。その経験から私は、今に集中することの大切さを実感するようになった。それだけでなく、今この瞬間に集中すると、自然と体が軽くなり、気持ちも楽になる。だから私は、未来のことにとらわれ、勝手に自分を疲れさせていたのかもしれない。今この瞬間に集中することは自然と力が湧いてくるだけでなく、今に全力で向き合えるため、自分の本当の力を引き出すことが、できるかもしれない。

また、友達と過ごす時間も今を生きることを実感できる大切な瞬間だと私は思う。休み時間に友達と笑い合ったり、他愛のない会話で盛り上がったりする時間は、あとから思い出すだけでも心が温かくなる。そのときの空気や、教室に響く笑い声は、写真や動画では完全に残せない。記録には残らなくても、自分の心に刻まれるものこそが大事だと思う。

私は時々、もし明日が突然なくなったらどうするだろうと考えることがある。私は十三歳だが、この十三年間はあつという間に過ぎた気がする。だからきっと、人生は長いようでとても短い。桜の花が満開になったかと思えば、あつという間に散ってしまうように、人生の時間もあつという間に過ぎてしまう。そして、二度と戻らない。一秒一秒が過ぎていくごとに、私の生きられる時間は確実に減っている。そう考えると、何気なく

過ごしている今この瞬間が実はとても貴重であり、とてもありがたいものだと気づく。人生の時間は限られており、二度と戻らないからこそ一瞬一瞬を楽しみ、今という瞬間を最大限感じることが大切なのだ。

そのうえ、つねに今私たちに起きていることは、すべてまだ誰も知らない一瞬だ。いつものように通勤、通学をしていても、ふと空を見上げると、昨日とは微妙に色の違う空が広がっている。人々は同じように席に座り、歩き、スマホを眺めているけれど、この瞬間の景色や、風や空気の匂い、光や影の角度、足音や、話し声でさえも、すべてが新しいことなのだ。けれど、私たちにはそれに気づいていないことが多い。未来のことを考え不安になったり、過去の失敗を思い出し、胸が痛くなったりしている瞬間にも私たちには、次々と新しい瞬間がやってくる。良いことばかりではなく、困難も同じようにやってくる。が、目の前に起きていることに向き合い、同じように自分も少しづつ進歩していくことが大切だと思う。

また禅の考えには、

「過去も未来もなく、あるのは今だけだ。」

と言う考え方があると聞いたことがある。その言葉に出会ったとき、私は大きな衝撃を受けた。確かに、過去はもう変えることができないし、未来はまだ来ていない。私たち生きていると実感できるのは今だけだ。過去の後悔や未来の不安にとらわれるだけでなく、この瞬間に集中することこそが、人生を最善に生きる方法なのだとあらためて痛感した。

この考え方には、勉強のときにも役に立つ。テストが近づくと点数への不安に心を搖さぶられることがある。しかし不安にとらわれても、勉強は進まない。むしろ一間に集中することで気持ちが落ち着き、良い結果につながるのだ。

今この瞬間を生きることは、決して大げさなことではない。朝の光を浴びながら、通学路を歩くとき、友達と笑い合うとき。そうした何気ない瞬間、一つ一つが私の人生を形作っている。過去や未来にとらわれず、今を丁寧に味わっていくことが、きっと自分を幸せにしてくれるのだと思う。

人生は限られているからこそ、私は後悔や不安にしばられず今この瞬間を生きていきたい。目の前の出来事に全力で向き合い、一步一步を歩んでいきたいと思う。

奨励賞（神奈川県立青少年センター館長賞）

共に生きる

横浜共立学園中学校 3年 長谷川 咲弥香

皆さんは身近で「発達障害」という言葉を聞いたことがありますか。あるいは、そのような方に会ったり、見かけたりしたことがありますか。発達障害には主に三つの種類があります。自閉スペクトラム症(ASD)、注意欠如・多動症(ADHD)、学習障害(LD)と呼ばれ、これらは他人とのコミュニケーションや社会生活に困難を生じさせることができます。ここで、私が過去に会った発達障害をもつ少女についての経験を話します。

彼女は、私が小学生の時、登校班と同じで一つ年下の少女でした。私は小学六年生の頃、登校班をまとめる役割である班長を務めっていました。彼女は発達障害を抱えていたため、じつとしていられず、道路の方に飛び出してしまうそうになり、つい「危ない」と注意したことがあります。すると、彼女は黙り込んでしまい、当時の私は発達障害者に対する接し方が分かりませんでした。なので、彼女に対して強くあたってしまうこともあります。後になって考えてみると、決して彼女自身が悪いわけではなく、私のような周囲の接し方に問題があったのだと思い、自分の言動を深く反省したと同時に、強く後悔しました。

では、どのように接したら良かったのでしょうか。そう思い、発達障害について調べてみると、発達障害者には、状況や気持ちを伝えることが苦手であったり、一度に複数のことを言われると混乱してしまったりするという特徴があると知りました。そして、発達障害者とのコミュニケーションのポイントとして、わかりやすい表現で短くゆっくり話すことが大事だと分かりました。そこで、私は早速、そのポイントを意識しながら彼女と話してみて、実践をくり返しました。すると、彼女は次第に心を開いて話しかけてくれるようになり、頼りにされることも増えました。私は少しでも彼女のことを理解できた気がして、嬉しかったのをよく覚えています。私が小学校を卒業する際には、彼女から手紙をもらいました。そこには、「こんどは、わたしが班長です。がんばります。」とつづられていました。そ

れから彼女とは会えていないのですが、いつかお互いに大人になって再会することができたら良いなと願っています。

さらに彼女は吃音症を抱えていました。吃音には、音を繰り返す「連発」、音を引き伸ばす「伸発」、ことばを出せずに間が空く「難発」などの症状があります。どの症状があてはまるかは個人によってそれぞれですが、原因不明で、治療法も確立していないといいます。私が通っていた小学校には、様々な障がいをもつ生徒が在籍する「特別支援学級」というものがありました。時々、通常の学級と合同で行事や授業に参加するという機会がありました。特別支援学級には彼女のように吃音症の生徒もいたため、そのような場面で関わりをもてたことで大きく得たものがありました。それは、自ら障がい者と関わりをもうとする勇気とあきらめない心です。

やはり私たちは障がい者に対して偏見をもっていたり、あえて距離をおこうとしたりすることがあると思います。実際に今までの私もそうでした。しかし、発達障害を抱える人と出会い、交流したことで、新たな発見がありました。一つは、障がい者は、周囲の理解とサポートを必要としていて、私たちはその思いに気づいて、本人が安心できる環境を整えることが重要だということです。また、これから生きていく上で障がい者と会うことがあるかもしれません。そんな時、障がい者と積極的に関わり、根気強く付き合いを続けることが、「共に生きる」ということにつながると信じています。

これらのことばは障がい者だけでなく、世の中にある差別や偏見に関しても言えることだと考えます。もちろん世の中にある全ての差別や偏見を「なくす」ということは難しいと思われます。一方で、差別や偏見を「減らす」ことはできるのではないでしょうか。

だからこそ、まずは相手を知り、理解しようとするところから始めてみませんか。

そして、「共に生きる」ということを一緒に目指しませんか。

奨励賞（神奈川県立青少年センター館長賞）

私らしいマイライフ

自修館中等教育学校 3年 前田 美空

人は皆、自分の「好き」を貫いて生きているだろうか。私は最近、そういうことを考えるようになった。SNSを見ていると、自分の「好き」を堂々と語ったり、それを行動に移したりする、いわゆる「推し活」などをしている人が多くいるが、その反面、誰かの目や言葉を気にして、「好き」を隠して生きている人の方が多いのではないかだろうか。

正直に言うと、私もその一人だ。本当はこれが好きだと言いたいのに、変に思われそうで口に出せなかったり、自分が好きな系統の服を見つけても、「私には似合わないかな」「人に引かれないかな」と不安になって結局親に選んでもらったものを着てしまう。そんな風に、自分の「好き」に正直になれないことが、今まで何度もあった。

今の時代、自分の「好き」を貫くのは、決して簡単なことではない。私たちは、家族、友達、先生、近所の人、そしてSNSなどのネット上の全く知らない誰かなど、日々あらゆる人たちの意見や視線にさらされている。中には明るく自分の好きを応援してくれる肯定的な言葉もあるけれど、時には、心に刺さるような否定的な言葉を受けることもある。たとえば、ある女の子が自分のことを「僕」と呼んでいたとする。彼女にとってはそれが自然で、一番しっくりくる言い方だったのかもしれない。だけど、親から「女の子なんだから私って言いなさい」と注意されたとする。きっと、彼女は戸惑い、やがてそれに感化されて「私」と呼ぶようになるだろう。一見すると小さな出来事に見えるかもしれない。けれど、それはその子にとって、自分らしさを一つ失うことだったのではないか。

一人称だけではない。服装や髪型、好きな色、好きな音楽、趣味、将来の夢……。そういうしたものにも、「女の子らしく」「男の子なんだから」「それはあなたには変だよ」と言われることがある。私も、友達に好きなものを間接的に「あれってここまで可愛くないよね」「バカらしいよね」と笑われたことがある。言った本人にとっては軽い気持ちで言った言葉だったのかもしれないが、その一言で私は人前で堂々とそれを好きだと言えなくなってしまった。今現在、確かに昔に比べれば社会全体が少しづつ多様性を認める方向に進んでいるのは事実だ

と思う。しかし、それでもなお、「人と合わせないと」「人と違ってはいけない」という考え方や雰囲気は、私たちのまわりに今も強く残っているように感じる。それなら「無視すればいいじゃないか」「人の意見なんて気にせず、やりたいことをやればいい」と言われることもあるだろう。だが、それをすることは実はとても難しい。親に逆らうのは勇気がいるし、友達と違うことをするのは仲間外れにされるかもしれないし変な目で見られるかもしれない、そんな恐れから、一步を踏み出すことはとても難しいのだ。

だけど、それでも私は、自分の「好き」を貫きたいと思っている。その理由はとてもシンプルで「人の意見に振り回される人生より、自分の気持ちを大切にする人生を送りたい」からだ。私の人生は、親のものでも、友達のものでもなく、私自身のものである。そんないたつ一つだけの大切な人生で、自分で自分の「好き」を否定し続けていたら、きっとどこかで後悔すると思う。

「これが好きだ」という思いは、自分にしかわからなく、自分だけの宝物のようなものだと思う。それを他人の何気ない一言で失ってしまうのは、あまりにももったいない。誰かに自分の「好き」を理解されなくても、自分自身で自分の「好き」を信じてあげることが、何よりも大切なことだ。

もちろん、すべてを貫くことは難しい。時には妥協も必要だし、誰かと合わせなければならない場面もあるだろう。その中でも、自分の「好き」を少しでも残せたら、それだけで十分価値があるものになる。たとえ小さな一步でも、自分で選び、自分で決めたという経験が、自分らしさにつながっていくだろう。これから的人生、自分の「好き」が何度も試される場面があるかもしれない。否定されたり、笑われたりすることもあるかもしれない。でも、それでも私は「自分はこれが好き」と胸を張って言える自分でいたい。たとえ周りの意見に流されそうになっても、自分の心の声を聞き逃さないようにしたい。

たった一度きりの自分の人生、人の言葉に縛られず、全力で自分の「好き」を貫いて満足するものにしていきたい。

奨励賞（神奈川県立青少年センター館長賞）

かわいそうではない

横浜山手中華学校中学部 2年 山田 玲安

私の妹は発達障害です。妹がまだ赤ちゃんの時、母が寝返りを打つのが遅いと心配して病院で診てもらったのがきっかけでした。その結果、妹は発達障害だと分かったそうです。

ただ、幼い頃の私は特に障害とかと意識していなかったと思います。それを意識し始めたのは私と妹が小学校に上がった時です。少しずつですが、妹は他の子と少し違うのかなと思うようになりました。例えば妹が小さい子みたいに騒ぐと変な目で見る人がいます。妹の話をするときも同情した目をされます。幼い私にはなぜか分かりませんでした。そんなある日、私は先生に「妹のことを知らないふりしていいよ」と言われました。なぜそう言われたのか当時の私は分からなかったです。学校でも姉として妹を助けていたのが鈍感だったのかと考えていました。今になってそれは先生なりの気遣いだったのではないかと思います。私が妹のことで孤立してしまうことを恐れていたのかもしれません。それでも私はやっぱり先生の言っていることが理解できません。なぜ障害者だからとそう差別しなくてはならないのでしょうか。

しかし時々思うこともあります。もし妹が他の障害もなく、普通の子だったらと。そうしたら私が一人で母の家事を手伝うこともなくなるし、何かあった時に相談できる相手もいるのになと思って、妹のことを妬んだ時もあります。そう思っていましたが妹の行動をよく見ているうちに気づいたのです。妹も母の家事を一緒に手伝おうとしていることに。ただやり方が分からなくて手伝っていないように見えただけということに。本當は妹も妹なりにやろうとしていたのです。そのことに気づいた私は私がやり方を教えればいいのだと分かりました。分からなかったら教えてあげる。とてもシンプルな考えです。それができてから私はより妹のことを理解したいと思えるようになりました。

よく妹の話をすると「かわいそうだね」と言われます。そう言われた時に私はよく思います。かわいそうって何だろう。なぜ私の妹はかわいそうだと言われなくてはならないのだろうか。私の妹はかわいそうなのか。

世の中にはたくさん的人がいます。みんなそれぞれ違う人です。少し背が低い人や、人見知りをする人もいます。私はそれを個性だと思っています。みんなそれぞれ異なった個性を持っているのなぜかわいそうな人と普通の人に分けようとするのでしょうか。私は時に笑ったり、泣いたりもする妹が一人の女の子としてとても好きです。妹の性格に救われる時もあるし、逆に憎らしく思う時もあります。けれど私はそのことがかわいそうと結びつくとは思いません。

今でも多くの人が「障害者」と言う言葉を聞くだけで「かわいそう」と言います。言わない人もいるのかもしれません。でも真っ先にその言葉が思い浮かぶはずです。しかし私はそんな人達が「かわいそう」ではなく、「これも個性の一つなんだね」と思えるようになってほしいです。私は一人の中学生として、妹の姉として言いたいです。障害者とか関係なくその人自身を受け入れてくれる、そんなありのままの姿の自分でいられるような社会に私は変えたいです。「かわいそう」と障害者と一線をひくようなことをなくしたいです。妹は妹、その人は決してかわいそうではありません。一人一人の改善からそういう社会になっていけるのではないかと私は思います。私は一日でも早くそういう社会になってほしいです。障害者だから「かわいそう」とかと言われないような社会に、それも個性の一つだと受け入れてもらえるような社会に。かつての先生の言葉が「知らないふりしていい」というのじゃなくなるような社会に一日でも早くなることを願っています。

奨励賞（神奈川県立青少年センター館長賞）

手紙の長所

厚木市立睦合中学校 3年 よろき はな 萬木 花梨

いきなりですが、私は手紙には気持ちをスッキリとさせ、明るくする効果があると思います。何かがあつて「モヤモヤ」時間が経っても解消されないそんな時がありますか。口に出せない、出せなかつた思いを自分の中だけにしまつておくことはかなりの負担がかかると思います。そこで大切なことが、紙に書き出すことです。

私は何か悔しいことや、ムカついたことがあってイライラした時にしばらく切り替えられなくなつてしまい引きずつてしまふことがあります。そんなときに誰でも無い人に向けて手紙を書き気持ちを全てぶつけると、心の中のモヤモヤが引き出され、いつも自分でもおどろくほど、不思議と気分がパッと明るくなります。手紙というのは誰かに向けて書くというイメージだけがあると思いますが、誰でも無い人に向けて書いたり、自分や誰かに向けて書いて必ず渡さなければいけないというわけではないのです。誰にも話したくないけれど心の中にしまつておくだけはしんどいなということを自分だけが見る手紙などの紙に書き出す。それだけで頭の中が整理され気持ちが軽くなると思います。

また、誰かに向けて手紙を書いて渡すことは、相手に気恥ずかしくて言えなかつたことや直接思いを伝えられなかつたことを落ち着いて書き出し、伝えることができます。これは私の職場体験での思い出です。小学校へ体験へ行き低学年クラスで担任の先生の方を見ていて、学ばせてもらったことや、沢山教えてもらったことがありました。しかし、期間がたつたの二日間しかなかつたことや常に忙しく過ごしていたということがあり、直接その場で学んだことや経験させてもらったことなどの感謝を伝え切ることができませんでした。最終日に職員室で挨拶はさせてもらえたものの自分の中でもまだ一度に沢山のことを経験して頭の整理もつかないままの状態での

挨拶だったので気持ちを全て出し切ることも、担当してくださつた先生個人に伝えることもできなかつたので実習が終わつてから沢山の楽しかつた気持ちと学んだことの記憶で頭がモヤモヤしていました。ですがその後、授業の時間内で実習記録のプリントやメモを見直しながら体験したことを整理し、模造紙を制作したり、先生宛の感謝状を書き伝えたかった感謝の気持ちを伝え切れたことでそれまでの心残りが消えてスッキリしました。私のように直接思いを伝える機会がなかつた人や、普段一緒にいるけれど気恥ずかしくて感謝の気持ちがあるのに伝えられない人は、そのままずっと抑え込むのではなく手紙という選択肢で伝えるのが良いと思います。

そして手紙にはもらった側にも、メールなどでメッセージを伝えられた時と比べ沢山の良い所があるのでおすすめです。手紙にはメールなどと違い温かみがあると思います。よくメールでの文字だと冷たく感じることがありますか。メールでの文字と手紙での文字ではかかる時間が違います。ですから手紙の方がその人が書いてくれたという直筆の温かみや、書いていた時間、自分のことを思ってくれていた時間というのが生まれるのでより心のこもつた文章に感じるのだと思います。また宛名が記載されている手紙ではお互いの関係性により呼び方があるので相手との特別感やその人の手書き文字の癖、手紙をもらったときのワクワク感、手元に残り続けるなどといった特別感があると思います。

これまで説明したとおり、手紙には紙に書き出す自分にとつても、渡される相手にとつても気持ちを明るくしてくれる効果があります。皆さんもぜひ誰かに向けてでも自分に向けてでも、心の中だけに思いを抑え込まず、紙に書き出して気持ちを整理してみてください。たまには誰かに手紙を送つてみませんか。

＜参考＞

第47回令和7年度「中学生の主張 in かながわ」

入賞候補作品一覧（順不同）

吃音症を乗り越える	南足柄市立岡本中学校 3年	露木 莉菜
「好きこそ物の上手なれ」	横浜共立学園中学校 3年	八木 華凜
勇気への一步	横浜共立学園中学校 3年	日岐 明日香
止まることは、進むことの始まり	横浜共立学園中学校 3年	佐藤 詩乃
カラフル世界	横浜共立学園中学校 3年	佐伯 琴子
「比べること」のあるべき姿	厚木市立睦合中学校 3年	宗像 瑣々愛
急がば回れ	厚木市立睦合中学校 3年	鶴丸 美琴
努力と継続	厚木市立睦合中学校 3年	佐藤 緒心
思い切って行動	厚木市立睦合中学校 3年	山崎 彩瑛
繰り返すことの大切さ	伊勢原市立中沢中学校 3年	宮下 輝香
バスで出会った素敵なおじさん	神奈川県立相模原中等教育学校 1年	山中 美侑
成功の裏側にあるもの	神奈川県立相模原中等教育学校 1年	畠瀬 優杏
「やってみる」が私を変える	神奈川県立相模原中等教育学校 1年	市川 怜奈
応援の力	神奈川県立相模原中等教育学校 1年	宮本 芽唯
理想の大人物	神奈川県立相模原中等教育学校 2年	鈴木 美羽
「心の病」について	平塚市立春日野中学校 3年	鈴木 琴葉
部活動が教えてくれたもの	茅ヶ崎市立円蔵中学校 3年	伊藤 将汰
野球の怪我から学んだこと	横浜市立平戸中学校 3年	高田 泰成

＜参考＞「第47回少年の主張全国大会」内閣総理大臣賞

「伝える」

鳥取県 鳥取市立桜ヶ丘中学校 3年 谷口 鉄馬

手を挙げた瞬間、みんなの息を吸う音が聞こえる。そして合唱が始まる。穏やかに始まった合唱が坂を登るように盛り上がっていく。僕はどんなふうに歌ってほしいかを、手で、そして全身で表現する。音楽が弾ける。僕が好きな瞬間のひとつだ。

僕は中学校で、合唱コンクールの指揮者を三度務めた。今年の曲は「心の瞳」。練習はまだ始まったばかりだ。

僕が指揮をするのは、口唇口蓋裂という病気の影響がある。僕の唇では、歌う時に上手に発音をすることができないが、指揮者なら、みんなの役に立つことができるからだ。

僕は生まれた時、唇と上の顎が裂けていた。このままで、母親の乳を吸うことができずに死んでしまう。成長しても唇の隙間から息が漏れてうまく話すことができない。僕は、生まれてすぐに手術を行なった。

顎と唇の隙間は一応塞がったものの、鳥取の病院では、それ以上の対応はできなかった。両親が必死になって探し、岡山の病院で、赤ちゃんの僕はまた手術を受けた。手術を何度も繰り返し、何年も通院を繰り返した。今でも年に一度、岡山に通っている。そのおかげで、今では食事のこともできるし、会話することもできるようになっている。

しかし、人と話す時に心に引っ掛かりがあるのも事実だ。発音がしにくいので、僕の言葉がどう受け止められているのか、相手の表情を気にしながら話すこともある。実際、何度も聞き返されることや、発音のことをからかわれることがあった。何度も聞き返される時は、相手に対して申し訳ない気持ちになる。からかわれた時は、馬鹿にされたことに苛立ちを覚える。何を言っても無駄だと感じて諦めることがある。

小さい頃、口元にマスクをつけた僕のことを、見知らぬ女性が「かわいいねえ」と言った。しかし、マスクをとった僕の口元を見た女性は、僕のことを「かわいそうな子」と言ったそうだ。「かわいい」と「かわいそう」。わずかな違いかもしれない。けれど母にとっては大きな違いだった。「かわいそう」という言葉に、「不幸な子」という意味を感じたのかもしれない。母は「鉄馬は可哀想な子じゃ

ない！」と強く言い返したという。

そんな母も、「こんな体で産んでしまってごめんね」と口にしたことがある。そのとき僕は「気にしてないし、大丈夫だで」としか返せなかつたけれど、両親にとても感謝しているのだ。この病気を治してくれるためにたくさんのことをしてもらった。歯の矯正をするにも、僕の場合は特別な処置が必要なので、岡山の歯科医に毎月通わせもらっている。ほとんどの場合、父が送迎してくれる。こんなふうに、お金も、時間も、愛情もたくさんかけてくれた。僕の唇は、その証だから。

そんな僕が、中学一年生で合唱の指揮者になった。未経験のこの役割に強くひかれ、すぐ立候補した。実際にやってみると、どうやったら歌い手に的確に伝わるか、手で伝える面白さを知った。自分なりに指揮をアレンジして、どの部分をどう歌ってほしいのか、楽しみながら伝えることで、今までにない達成感を得られた。正しい発音は一つだけ、人を感動させる音楽は無限にある。僕は、僕の指揮でそれを表現できることに、言いようのない喜びを覚えた。指揮することで表現できる世界の広さは、僕が歌うことで表現できる世界を大きく飛び越えていった。

口唇口蓋裂の子供たちは、話すこと、表現することを躊躇しがちだ。でも、自分のことを伝えたい、表現したいと強く思っている。諦めずに伝えてほしい。言葉でも、それ以外でも、自分を表現する方法は、きっとある。伝えたい思いを受け止めあえたら、病気や障害、色々な違いにかかわらず、お互いの世界はもっと広がるはずだ。

今年の合唱曲「心の瞳」はこう始まる。

「心の瞳で君を見つめれば、愛すること、それがどんなことだか、分かりかけてきた」

言葉で言えない胸の暖かさを、見つめ合うことで伝えるという詩だ。

伝わる。きっと伝わる。だから伝えることを諦めないでほしい。言葉でも、音楽でも、見つめ合うことでも、自分らしいやり方が、きっとあるはずだ。

実施概要

1 目的

中学生が、日常生活の中で考えていることを作文にして発表することを通して、広い視野と柔軟な発想や創造性とともに、物事を論理的に考える力や自らの主張を正しく理解してもらう力を身につけることを目的とする。

2 主催

神奈川県立青少年センター 独立行政法人国立青少年教育振興機構 神奈川県

3 後援

神奈川県教育委員会 神奈川新聞社 **NHK** 横浜放送局 **tvk**
神奈川県青少年育成アドバイザー連絡協議会

4 対象

神奈川県内在住または在学の中学生（国籍は問わないが、日本語で発表できること）

5 応募期間

令和7年6月1日（日）～9月8日（月）

6 発表大会

- (1) 期日 令和7年9月28日（日）14:00～16:15
- (2) 会場 県立青少年センター 紅葉坂ホール
- (3) 視聴者 131名
- (4) 内容 作文発表（優秀賞以上の7名） アトラクション 表彰

7 選考

- (1) 作文審査（事前審査）※令和7年9月16日（火）に実施

審査会において作文発表大会出場者7作品と奨励賞受賞10作品を決定
(作文審査員)

神奈川県立図書館広報・生涯学習推進課	山崎 義昌	主任主事
神奈川県教育局支援部子ども教育支援課	平出 恵利子	教育指導員
神奈川県福祉子どもみらい局子どもみらい部青少年課	高木 葉奈	主任主事
神奈川県立青少年センター指導者育成課	長南 悠太	主査

- (2) 発表審査

作文発表大会において、最優秀賞と各優秀賞を決定
(発表審査員)

神奈川新聞社報道部	成田 洋樹	記者兼論説委員
神奈川県公立中学校長会（秦野市立西中学校）	丸野 研二	校長
神奈川県青少年育成アドバイザー連絡協議会	佐藤 節子	会長
神奈川県教育局支援部子ども教育支援課	本間 隆司	課長
神奈川県立青少年センター	平本 元昭	副館長

8 表彰

・最優秀賞（神奈川県知事賞）	1名
・優秀賞（神奈川県教育長賞）	1名
・優秀賞（神奈川県福祉子どもみらい局長賞）	1名
・優秀賞（神奈川新聞社賞）	1名
・優秀賞（NHK横浜放送局長賞）	1名
・優秀賞（tvkかながわMIRAI賞）	1名
・優秀賞（神奈川県青少年育成アドバイザー連絡協議会会長賞）	1名
・奨励賞（神奈川県立青少年センター館長賞）	10名

9 応募状況

- ・応募者総数 835名
- ・参加学校数 35校

令和7年度「中学生の主張 in かながわ」記録集

編集・発行

神奈川県立青少年センター

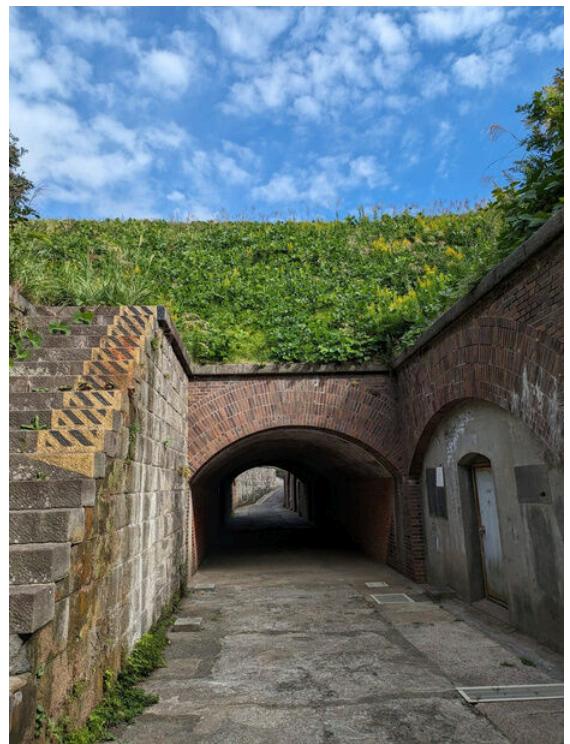
〒220-0044

横浜市西区紅葉ヶ丘9-1

電話 045-263-4466

ファクシミリ 045-242-8190

本記録集の無断複製、転載等は禁止いたします。



神奈川県立青少年センター 指導者育成課
Youth Leadership Development Section , Youth Center , K. P. G.